

文芸OGネットワーク通信



Vol. 14

〒101-8437 東京都千代田区一ツ橋 2-2-1
文芸OGネットワーク 代表 稲見 和子
発行：2011. 3. 26

共立女子大学文芸メディア研究室内
Tel/Fax 03-3237-2681
URL www.kyoritsu-wu.ac.jp/bungei

共立祭2010 開催

2010年の共立祭は10月16日(土)・17日(日)の2日間にわたって開催された。今回のテーマは「百花斉放」、テーマカラーは「緑」。OG ネットは今回も共立祭に参加した。

OG ネットの展示テーマは「宝塚歌劇」。「OG ネットがなぜ宝塚?」と不思議に思われる方もあろうかと思うが、これは、展示における紹介文に詳しく述べるとおり、OG ネットの現在の主な活動である「劇芸術資料整理」の作業から生まれてきたテーマである。

会場の中の壁周囲と外廊下の一部壁にパネル仕立てのポスターや年表を展示し、宝塚関連のパンフレット、冊子などを並べて、来場者に手にとって見てもらえる形をとった。さらに宝塚の演目のビデオを流し、団欒の場を設け、緑の袴が有名な宝塚の衣装や生け花で会場を彩った。茶菓で歓談する人、時間をかけて熱心に見る若い来場者で賑わった。



会場風景

会場の雰囲気をお伝えするために、企画の趣旨説明の展示を、そのままの文面で紹介する。

「宝塚歌劇100周年にむけて」展

「文芸OGネットワーク」は、文芸学部創設50周年を機に文芸学部、文芸研究科の卒業生、修了生によって創られたミニ同窓会で、今年で満7年になります。

文芸学劇芸術研究室には、これまでに蒐集、寄贈された近現代の演劇、芸能多分野の資料が山積されていました。

「文芸OGネットワーク」では活動の一環として、これらの未整理の演劇・芸能関係資料を整理・分類する作業をしています。貴重な資料が検索・閲覧などによって有効活用されることを目標に、今後とも作業を続けたいと思っています。

この資料整理を通して私たちは、近代化の過程で、多くの演劇・芸能集団が生まれ、育ち、或は滅び、消えていったかを改めて知るとともに、時代の要求や流行が促す観

客の趣向・動向なども窺うことができ、貴重な体験を得ています。

今回の展示は色々な分野の演劇・芸能集団の中から「宝塚歌劇」を選んでみました。多くの集団の激しいせめぎ合いの中、また戦災や世界的な不況などの非常時をくぐりぬけ、着実に特有の舞台スタイルを確立して、100周年を迎えようとしている「宝塚歌劇」に興味を覚えたからです。

「清く正しく美しく」は「宝塚」ファンならずとも馴染みのフレーズであり、「宝塚」の精神であると同時に世代を受け継いできたファンの心にもつながるものなのでしょう。

資料整理の作業から生まれたこの展示を是非ご覧ください。



共立祭展示をふりかえって

資料室の演劇資料を一般に公開するのは、5月の文芸サロン講座「宝塚歌劇 100周年にむけて」に続いて2回目である。この時は急な計画でもあったので、とりあえず96年の長い歴史を2枚のパネルにまとめ、古き時代のスターのプロマイドをパネルにはり、さらに3枚の公演ポスターの前に「ベルサイユのばら」や「エリザベト」などの公演プログラムを並べる、というものであった。次回はもう少し準備期間をもうけて充実した展示を行いたいという気持ちだが、この共立祭で実現したのである。

劇芸術研究室の鈴木国男先生あてに毎月送られてくる宝塚劇場の公演ポスター8枚に加え、資料室にはない珍しい資料も研究室からお借りすることができた。また年季の入った宝塚ファンのメンバーとご友人からは、昭和20年代のプログラム、「宝塚おとめ」、さらにこれも貴重な、切符の半券を提供していただいた。写真からもうかがわれるように、現在のよ

うな無味乾燥としたものではなく、華やかさがにじみでていて、観る前から浮き浮きとした気分させてくれる宝塚らしい切符である。

宝塚歌劇団はスタッフ以外全員未婚の女性、という世界にも類をみない劇団であるが、出身者の多くが舞台、映画などさまざまな分野で活躍していることからその実力のほどがうかがわれよう。しかしまた、女性だけ、という特殊性も否定できない。展示に見入っていた若い男性は、「なぜ宝塚がいいのか、男のぼくには分かりません。プラモデルに夢中になっている男性を女性が理解できないのと同じでしょうか？」と宝塚ファンの学部学生に問いかけ、学生が答えにとまどっている場面もみられた。今回はバザーの熱気こそなかったものの、展示から話がはずみ交友の輪がひろがる、という和やかな雰囲気が漂っていた。

貴重な資料をお貸しくださり、また提供してくださった劇芸術研究室と卒業生有志のみなさまに心より感謝申し上げます。

多田久恵 (S45院卒)



「河本友子展」

「かたちを求めて」を
訪ねて

2010年9月6日～11日、河本友子さん（S41卒）が、銀座のみゆき画廊で3年ぶりの個展を開いた。9月とはいえ、照り返しが強く、アスファルトの道もビルも猛暑で覆われた街から、一歩みゆき画廊にはいると、清涼感が全身を包んだ。ほぼ正方形に近い会場の四方をぐるりと取り囲むように掛けられた19点の作品が、その清涼感の元だ。

そこには墨絵の世界が広がっていた。素材は、墨に水彩、墨に油彩。パステルを組み合わせた作品もあるが、ほとんどは和紙に墨。

広場-ひろば-

以前は油絵を描いていたが、今はモノトーンの美しさに惹かれ、究極は白黒だと思ふようになったという。「なるべく白と黒でなんとか見せることをしている」と、河本さんは言う。その世界は、日本の伝統的な墨絵を想像する方には、驚きだろう。描かれたものは抽象画といってよい。抽象の世界も、はじめにアイデアがあって意図的に描くと、面白いものができるのではないかと考えている。

使う紙の質、墨の濃さなどによって、筆を紙に載せたとき、墨を上から落としたときなど、墨が流れてできる形はさまざまである。



墨を落として偶然に描かれたものが景色を作る。その偶然性が面白いと感じる。

展示された絵のそばには絵のタイトルがついていない。「意図してできたものではないから、先入観なしに、絵を見て自由に発想し感じてほしいから」と言う。作品はこの先どんな発展を遂げていくのかと、期待の膨らむ展覧会であった。

サークル探訪

フラダンスサークル

「可愛い！」というのが私の第一印象だった。しかし、本格的なフラダンスを目指している彼女達の練習は厳しく、毎週木、金曜日に2時間ずつ、それは夏休みもなく続けられる。怠れば、動作ではなく、身についた微妙な感覚を忘れてしまうと言う。夏合宿では、しっかりと基礎作りをして、その後、学年ごとのグループ練習となる。基本的に、フラダンスは1人で踊ることはないで、チームワークが要求される。

現在総勢45名の大所帯であるが、創立時（4年前）は、苦勞が多かったと創立者の原結衣子さん（現国際学部助手）は話してくれた。発起人は2人。予算が少ない為、指導者がなかなか見つからず、それでも引き

受けてくれたのが、現指導者の竹内ヒロ氏だった。そんな先輩の踊っている姿に魅了され入部したという部長の安藤菜那さんと副部長の塩澤実奈さん。全体をまとめていくのは大変だが、サークルに来れば必ずみんなに会える。友達ができたことが一番良かったと話してくれた。

フラダンスには、古典（カヒコ）と現代物（アウアナ）があり、古典は、王と神に捧げるもので、敬虔な心を表す為、無表情、白いドレスで踊られる。「カイウラニ」に代表される。逆に現代物は、「カイマナヒラ」や「ブルーハワイ」のように、表情豊かに踊る。自然な笑顔になるまでの鏡を使つての練習は大変だそう。島により曲調が違い、衣装もアイランドカラー（例、ハワイ島は赤…）の衣装を着る。演劇的要素もあるので、霧、波、山等の自然を表す、決まった

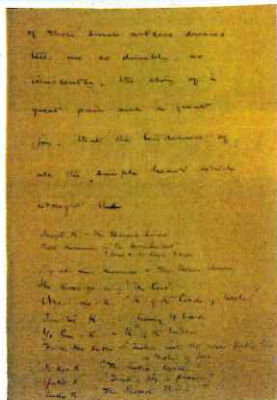
フリを組み合わせで構成される。そして愛情（マナ）や神に対する尊敬の思いを表現していくと言う。踊る時は常に素足である。衣装は、取り寄せてから、自分の体に合わせて調整する。花の髪飾りは生花なので、しおれないように、直前に自分で編んで付けるのだそう。大変な作業だが、手作りをすることにより、マナを表現できると思っていると言う。

フラダンスはハードに見えるが、百歳の方でも踊り方で、踊れるということなので、トライしてみてはいかがか…。



小泉八雲展と

染村絢子氏の資料を見て
—小泉八雲生誕 160 年の記念展—



染村絢子氏蔵の 'A pilgrimage to Enoshima'
(江の島行脚)草稿
(「小泉八雲展」カタログより転載)

2010 年はラフカディオ・ハーン＝小泉八雲生誕 160 年・来日 120 年の年であった。神奈川近代文学館では、これを記念して昨年 10 月 1 日～11 月 10 日まで、彼に関する特別展が開催された。文芸 1 期生の染村絢子氏は、この特別展にこれまで収集してこられた資料を提供されていた。それらはこの展示中でも大変貴重な資料であると思われる。

- 「日本警見記」に収録されている「江の島行脚」の草稿
- [KWAIDAN] 中の「雪女」の草稿

○東京大学講義ノート・タイプ原稿とその収納木箱等、6 点である。

染村氏は卒論に小泉八雲をとりあげられ、卒業後も現在に至るまで研究をされている。その過程で集められた貴重な資料をここで私たちも拝見することができた。

帰途「港の見える丘公園」を歩きながら、振り返ってみると、この記念展は日本での第一歩をこの地にしたハーンの日本文化への深い愛情と洞察力の鋭さを認識できる展示であった。

小林豊子 (S35 卒)

劇芸術資料室から

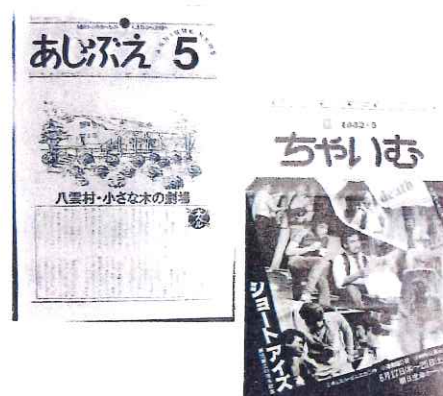
資料室にはプログラムなどの他に、劇団ニュース、後援会ニュースなどもダンボールに収められている。たとえば俳優座からは「コメディアン」が、民芸は「民芸の仲間」を、そして文学座は「文学座通信」と「ちやいむ」という劇団通信を発行している。定期購読という形をとっており、次回公演のお知らせ、作品解説、俳優の素顔や演劇活動の紹介、ファンとの交流などが主な記事である。それぞれの機関紙からその

劇団の思想と個性がはっきり伝わってくる。

数は少ないが見逃せない会報がある。島根県松江の「劇団あしぶえ」発行の「あしぶえ」もその一つである。1985 年ごろ創立されたらしい劇団で「演劇は心の食べもの しまねから全国へ」を標語に掲げている地域劇団である。1995 年 8 月発行の第 6 号(通算 21 号)では、「待望の『しいの実シアター』建設」のニュースが熱っぽく語られている。今もこの劇団は活動

しているのだろうか。大事にとっておきたい資料である。

多田久恵 (S45 院卒)



掲 示 板

「井上ひさしの劇世界」開催のお知らせ

場所：本館 1 階展示室 期間：2011 年 5 月 26 日(木)～7 月 4 日(月)
本館 1 階ホールでは、共立女子学園所蔵の、江戸時代の衣裳、身の回りの品、あるいはヨーロッパの美術品など、さまざまな資料を定期的に展示しています。今回、劇芸術コースの責任で、故井上ひさし氏の資料を上記の日程で公開することになりました。OG ネットが整理をお手伝いしているプログラム、ポスターなどを中心に、こまつ座も所蔵していない貴重なものが公開されます。ぜひご覧下さい。

OG ネット総会：6 月 4 日(土)、11:00～本館にて開催予定。

文芸サロン講座：総会終了後 13:30～開催予定。

講師 井上麻矢氏(こまつ座社長)

演題「父とこまつ座」(仮題) 同会場にて井上ひさし氏の資料一部展示。

編集後記

小泉八雲が暮らした松江。その地域劇団「あしぶえ」の標語が「演劇は心の食べもの(後略)」だという。思えば、宝塚歌劇もモノトーンの抽象画もフラダンスも、みな心の栄養になるのではないだろうか。忙しい日々の生活の中で、だれもが心豊かに暮らしたいと願う。「通信」をお読みいただき、「心の食べもの」を召し上がっていただけたらと思う。(E) 大震災の被災地の皆様に心よりお見舞い申し上げます。